若越郷土研究
45の3

大谷寺「蓮糸曼陀羅の図」
（泰澄大師本尊感得の図）についての研究

佐々木　英　治

一、大谷寺の伝承

天平期に蓮糸で織られた蓮布に描かれた泰澄大師十一面観音感得の図である。

二、文化財集中地区特別総合調査報告第10集『白山を中心とする文化財（福井県）』（文化庁）における真保亨調査官の見解

揚柳観音像（麻布着色、縦一四八㎝、横一五七㎝）の大幅は珍しい麻地に太い衣文線、赤や白の絵の具で淡彩、異色に富む画風は、おそらく朝鮮李朝頃の制作と考えられよう。

三、本図の概要

本図は、一見すると真っ赤な太陽を背景に置いた大日如来坐像にみえるが、よく調べてみると手は外縛の形で左膝を抱えており、法界定印とは異なることから如来像ではないことが分かる。本図は、本尊を中心に左に水瓶、右に竹、左下に童子と画面構成がなされており、善財童子が観音菩薩に対面する場面を描いた高麗・李朝の水月観音菩薩図と基本的には同類の仏画と言える。この仏画は縦一四八㎝・横一五七㎝の大幅で、この種の仏画としては、これまで管見する限りにおいては佐賀県唐津市の鏡神社と京都市大徳寺の水月観音図に次いで、全国で三番目に大きいものである。

本尊は、朱衣の化仏を一躰正面に付け、朱色の花や冠帯で飾られた宝冠を頂き、左膝を両手で抱き、正面を向いて岩上に坐す上半身が如来形の珍しい水月観音菩薩である。顔は、無表情で硬く、瞳の位置は如来の目のようである。長くて細い目許、非常に小さな口などは高麗仏画の特長を示している。耳には巻毛、耳璫がみられる。

髪は両肩から臂までほぼ左右対象に垂れ、墨による太い四本の線で形式的に描かれている。右手には腕釧がみられる。冠や胸を飾る瓔珞は、胸から腹部、膝、岩上へと垂れている。

着衣は、衲衣を右肩先を覆う偏祖右肩にまとい、右腕には覆肩衣という衣を覆っている。また、衲衣の内側腹部には僧祇支とそれを締める結紐がみえる。着衣は高麗仏画に見られる服制そのものである。特に僧祇支とそれを縛る結紐は、日本の仏画では一般的に見られないものである。衣の色は赤や白、緑など淡彩で、高麗仏画の特色である金彩の円文や華麗な様々な文様は見られない。

観音が坐す岩座などの描写として、高麗・李朝初期に多く見られた皴法の技法は用いら

れていない。岩座の左側には、水瓶とその承盤である透明な二つのガラスの容器があり、その左側の一つに水瓶が置かれている。この水瓶に柳枝が生けられているかどうかは剝落がひどく確認できない。あるいは、もう一つの容器に柳枝が置かれている様にも見えるが、こちらも今一つ確認は出来ない。いずれにしても、二つのガラス容器が描かれていることは珍しい。

右側には、斜面に竹と筍が各々三本づつ描かれており、これも珍しい。竹は、真っすぐに上方に伸びているが、画面の上端までは描かれてなく、左方から右方に広がる瑞雲に覆われている様に描かれている。高麗・李朝の仏画の中でこの様な描写の例はこれまでのところ見ていない。大和絵的で和様を感じさせる部分である。竹の左横の岩の上には上方に頭を上げて止まっている1羽の鳥が描かれている。緑青の色が羽の上にわずかに残っている。

右側下辺の画面の部分は、不鮮明でよく分からないが、或いは岩間から流れ落ちる泉流が描かれているかもしれない。

本図では、画面上方まで波濤が描かれ、その水平線は頭光の中ほど迄に達する。手前から大中小の波で描かれた延々と広がる大海原の波濤表現は視線を奥へと導く。この種の波濤を表した作例としては、大和文華館の「水月観音図」がある。中国宋代の絵画手法を用いたものといわれる。左側、水平線上に真っ赤な太陽が今にも沈もうとしているのであろうか、或いは昇り始めたのであろうか、大きく描かれている。この種の観音図に太陽が描かれたものとしては、これまでの管見では例がなく非常に珍しい。衲衣の朱色と比べると太陽の赤があまりにも濃いことから、あるいは後補の補色の際、何らかの理由で月から太陽に塗り変えられたとも考えられるが、想像の域を出ない。

左側下辺には蓮弁に乗った善財童子が、風を受けながら観音に対面し合掌している姿が描かれている。しかし、観音と童子の視線はあっていない。この事は、多くの水月観音図が左右いずれかを向き、善財童子と向き合った構図になっているのに対し、正面向きとなって視線を合わせていない本図は、山口県の巧山寺や奈良市の大和文華館の水月観音図と同様数少ない事例に属するといえる。蓮弁に乗っている童子の例は大和文華館にみられるが数は少ない。

四、曼陀羅の図についての考証

①蓮糸で織られた繊維であるかどうか

仏画の下端の糊しろ部分（〇・三㎝×二・一㎝）を許可を得て取り、蓮糸で織った繊維かどうかについて、福井県工業技術センターに依頼して、本図の繊維と蓮の繊維の一〇〇〇倍、二〇〇〇倍の拡大写真を撮り、麻、綿、絹などの基礎データとの比較検査を試みた。但し蓮糸は平成十年泰澄塾で南条町の蓮（備中種）から紡いだものである。本図の繊維は糊しろの部分からサンプルを得た関係上、数百年間、糊が繊維の中にしみ込んでおり容易には糊を除去出来ず分析は困難であった。その様な条件のもとで『AATCC TECHNICAL MANUAL VOLUME 54』記載の麻、綿、絹等に関する基礎資料との比較検証で本図の繊維は、綿や絹とは基本的な違いが認められた。また、本図の繊維と蓮（備中種）との

間にも違いが認められた。しかし、サンプルの不鮮明さから麻か、蓮かどうかについては、明確な結論を得ることは出来なかった。今後は、より鮮明なサンプルを得ることと、多種の蓮との比較検査並びに蓮に関する基礎データの取得等が課題として残った。

②本図を「水月観音図」と称したことについて

本図の画面の構成は、大海原に顕現する普陀山の観音に対面する善財童子と水瓶、竹などから成り、水月観音図としての基本的要素を有している。このことから、『高麗・李朝の仏教美術展』（山口県立美術館、平成九年版）のP一七三「九　水月観音図」の解説に従って水月観音図と称した。

③制作年代はいつ頃か

制作年代については、専門家の鑑定を待たなければならないが、本図については少なくとも次のことが言える。

(a)　細長い目許、小さな口、華麗な瓔珞、衣装などには高麗仏画の特色が見られること。また、反射光赤外線写真に見られる本図の隅々にまで手を抜かずに描かれた下絵には、高麗仏画に見られる完璧をめざす朝鮮画工の造形意思が見て取れること。

(b)　着衣は、高麗仏画に見られる服制そのものに描かれていること。

(c)　本図の概要の項で度々指摘したように、本図には現存する高麗仏画にあまり見られない珍しい構図が多いこと。

(d)　高麗仏画の特色である透明なヴェールや円文をはじめ、様々な華麗な文様等がみられないこと。技術的にも北宋に由来する皺法の技法がみられないこと。

(e)　本図の画面構成には、大和文華館（奈良市）や豊乗寺（鳥取県）の水月観音図などにみられる波濤、蓮弁に乗る童子、左膝を抱く姿等その影響と思われる構図が随所にみられること。

従って(a)、(b)からは本図の観音は、高麗仏画の特徴を持つ観音図と言えるが、(c)、(d)からは、本図が高麗時代の仏画ではないことを明らかにしている。また、(a)からは、この制作者が日本人ではなく、朝鮮の画工であることを強く示唆している。

この様なことから考えると、本図の制作年代は、どんなに遡っても15世紀後半まで。恐らくは李朝初期（一三九三―一五五〇）後半に朝鮮の画工によって、朝鮮で、場合によっては日本で描かれたものではないかと推測される。更に、(e)からはその制作にあたっては、いくつかの水月観音図を参考にしたことが窺える。

尚、この仏画が大谷寺にもたらされた時期については、伝承もなく今のところは分からないが、恐らくは、江戸以前、朝倉時代の頃ではなかろうかと思われる。大谷寺に所蔵されてからは「泰澄大師観音感得の図」として、多くの人々に語り伝えられ大きな信仰を集めてきた。

参考図書

(1)『高麗・李朝の仏教美術展』（井手誠之輔　楠井隆志　岩井共二　他　山口県美術館一九九

七）
(2)『韓国絵画史』（安輝濬著　藤本幸夫　吉田宏志訳　吉川弘文館　一九八七）
(3)『高麗仏画』（菊竹淳一　吉田宏志著　朝日新聞社　一九八一）
(4)『文化財集中地区特別総合調査報告第10集　白山を中心とする文化財（福井県）』（真保亨他　文化庁　一九七二）
(5)『原色日本の美術7仏画』（島田修　柳沢孝相賀徹夫著　小学館　一九六九）
(6)『AATCC TECHNICAL MANUAL volume54』（AMERICAN ASSOCIATION OF TEXTILE CHEMISTS AND COLORISTS 1978）

※大谷寺の所在
丹生郡朝日町大谷寺四十―四―一